

現存しない与太郎淵（岐阜県）におけるヒブナの記録

岸 大弼¹⁾Records of scarlet crucian carp (hibuna) *Carassius* sp. in the extinct Yotarobuchi Pond (Gifu Prefecture, Japan)Daisuke KISHI¹⁾

要 旨

与太郎淵は、岐阜県郡上市白鳥町歩岐島地区にかつて存在していた池で、コイ科フナ属の体色変異個体であるヒブナの分布域として知られていた。しかし、1956年に埋め立てにより消失した後、ヒブナが分布していたことは現地においても忘失されつつある。本研究では、その分布記録をあらためて提示するため、地籍図・現地調査ならびに文献調査を実施して情報を整理した。現地調査では、いずれの地点でも与太郎淵の痕跡は確認されなかったが、過去の地籍図および聞き取りによる情報から、その位置・形状や周辺の水路の存在が判明した。文献調査では、与太郎淵の埋め立ての経緯や名称の由来が確認された。また、ヒブナは、1934年の文献を最後に分布記録が途絶していたが、聞き取りによる情報から、1950年代まで生息していた可能性が示唆された。本研究では、ヒブナの来歴については不明な点が残ったものの、生息していた水域や年代について一定の知見が得られた。

キーワード：フナ、体色変異個体、長良川水系、文献調査、古書、地籍図

(2020年11月4日受付, 2020年12月31日受理, 2022年1月5日発行)

はじめに

日本には、大小さまざまな湖沼や池が多数存在する。しかし、人間活動による環境改変を受けているものは少なくなく、中にはその水域自体が消失した事例も実在する。国内では、農地への転換を目的に、古くから湖沼の干拓が行われてきた（小笠原・越田, 1965；益子ほか, 1970；西野, 2008；池田, 2015）。滋賀県の事例では、干拓により、琵琶湖に隣接する内湖と呼ばれる止水域が1940年の37箇所（29.02 km²）から1995年には23箇所（4.25 km²）に減少している（西野, 2008）。石川県の今江潟や京都府の巨椋池のように、広大な水域

が全面的に消失した事例もある（益子ほか, 1970；池田, 2015）。また、高度経済成長期からは、企業・住宅用地への転換を目的に、ため池の埋め立てが行われるようになった（武田, 2010）。兵庫県の事例では、1971年から2008年の間に12,000箇所ものため池が埋め立てられたという（武田, 2010）。干拓や埋め立てによって湖沼や池が消失すると、当然のことながら、水生生物の生息は不可能となる。コイ科モツゴ属のシナイモツゴ *Pseudorasbora pumila pumila*（環境省レッドリスト絶滅危惧IA類）を例に挙げると、宮城県の品井沼がその模式産地となっていたが（小西, 2010）、沼の全面的な干拓により（小笠原・越田, 1965）、模式産地そのも

¹⁾ 岐阜県水産研究所下呂支所, 岐阜県下呂市萩原町羽根 2605-1

Gero Branch, Gifu Prefectural Research Institute for Fisheries and Aquatic Environments; 2605-1 Hane, Hagiwara, Gero, Gifu, 509-2592 Japan

kishi-daisuke@pref.gifu.lg.jp

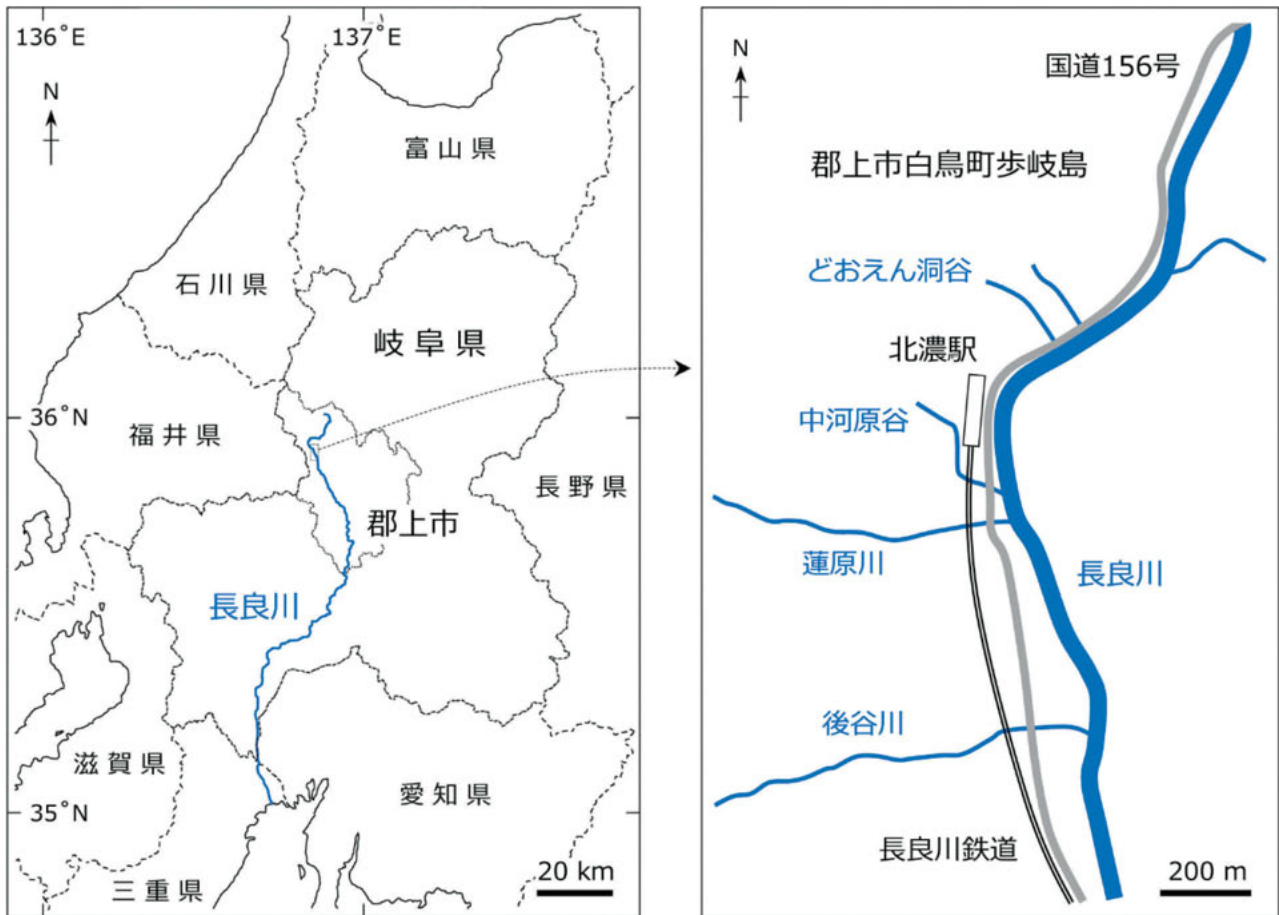


図1 岐阜県郡上市白鳥町歩岐島地区の位置。

のが消失している。このように、国内では湖沼や池の消失と同時に、そこに生息する水生生物の絶滅が進行しているのが現状と考えられる。

消失した湖沼や池における水生生物のかつての分布状況については、情報が十分に整理されているとは限らず、知見が不足している場合が多い。本研究が対象とした岐阜県郡上市白鳥町歩岐島地区の与太郎淵（文献によっては、旧字体で與太郎淵と表記）もその一例である。与太郎淵は、かつて長良川水系に存在していた池で、ヒブナ *Carassius* sp. の分布域として知られていた（岐阜県、1881；戸塚，1917；片野，1934）。ヒブナは、コイ科フナ属の体色変異個体のことで、北海道から沖縄県にかけての全国各地で確認されているが、いずれの地域でも局所的な分布であること、かつ生息数が少ないことから、希少な魚類として認識されている（黒岩，1927；針生・山代，1986；Ojima，1987；鹿野ほか，2017）。与太郎淵は、筆者が把握している文献の範囲内では東海地方におけるヒブナの唯一の分布域であり、特異的な事例であると考えられる。しかし、与太郎淵は1956年に埋め立てられたために現存せず（白鳥町教育委員会，1977；北濃地区伝承クラブ，1990）、ヒブナは絶滅したものと考えられる。与太郎淵が消失して60年以上が

経過した現在、ヒブナが分布していたことは現地においても忘失されつつある。また、与太郎淵のヒブナの標本や写真は確認されていないため、文献が唯一の情報源であるが、それらの文献の存在についても十分に認識されていないのが実情である。そこで本研究では、与太郎淵におけるヒブナの分布記録をあらためて提示することを目的とし、地籍図・現地調査ならびに文献調査を実施して情報を整理した。

方 法

現地調査は、2020年10月に岐阜県郡上市白鳥町歩岐島地区の長良川鉄道越美南線の北濃駅の敷地内とその周辺で実施し、ヒブナの分布域であった与太郎淵の跡地ならびに周辺の河川や水路の現況を確認した（図1）。また、現地で聞き取りを実施し、過去の水域や生息魚類に関する情報を収集した。この地区は、1897年以前は郡上郡歩岐島村であり、1897年に歩岐島村と周辺の村が合併して郡上郡北濃村に移行、1956年に北濃村と周辺の町村と合併して郡上郡白鳥町に移行した後（白鳥町教育委員会，1977）、2004年に白鳥町を含む郡上郡の全町村が合併して現在は郡上市となっている。越美南

線は、1934年に北濃駅まで開通し、1986年に日本国有鉄道から長良川鉄道に移管されている（渡利・有代、1996）。

現在、与太郎淵の埋め立てからすでに60年以上が経過しており、予備調査ではその位置の特定が困難と判断された。そこで、本研究では、歩岐島地区の過去（郡上郡北濃村大字歩岐島字下河原および中河原）、ならびに現在（郡上市白鳥町歩岐島字下河原および中河原）の地籍図を岐阜県地方務局八幡支局で取得し、それらを参照しながら現地調査を実施した。過去の地籍図は、作成年が記載されていなかったが、北濃駅の着工前の土地利用が記載されていたことから、北濃村が成立した1897年（白鳥町教育委員会、1977）から北濃駅が開業した1934年（渡利・有代、1996）にかけてのいずれかの時期に作成されたものと考えられる。北濃駅敷地内での現地調査は、長良川鉄道に申請したうえで、列車の発着がない時間帯に安全な位置から目視および写真撮影により実施した。

文献調査では、岐阜県図書館、岐阜県歴史資料館、郡上市図書館、下呂市はぎわら図書館において、与太郎淵に関する文献、ならびにそこに生息していたヒブナに関する文献を閲覧した。そのほか、国立国会図書館デジタルコレクションも利用した。なお、旧字体や旧仮名使いで記述されている文献があるほか、誤植と思われる箇所が一部の文献で見受けられたが、本研究では可能な限り原文のまま引用した。

結 果

地籍図・現地調査

歩岐島地区の過去および現在の地籍図を照合した結果、現在の北濃駅の西側の資材置き場の位置に池と考えられる水域が存在していたことが確認された（図2、3a）。過去の地籍図には、この水域は「谷川」と記載されており、与太郎淵という名称は記載されていなかった。しかし、聞き取りによる情報から、この水域が与太郎淵であることが確認された。このほか、1950年代に全長20 cmほどの赤い魚が与太郎淵にいたという情報が聞き取りで得られた。

与太郎淵の形状については、過去の地籍図に「長百四十八間 巾五間二尺一寸」と記載されており、長さ269 mおよび幅9.2 mと換算され、南北方向に細長い水域であることが確認された。面積については、過去の地籍図には「反別一段六畝十一歩」と記載されており、1,623 m²と換算された。

過去の地籍図では、与太郎淵の北側および東側に接続する複数の水路が確認された（図2）。これらの水路は、北東側の長良川やその支流どおえん洞谷などを水源

とし、与太郎淵に流入していたものと考えられるが、現地調査では確認されなかった。現地調査では、南側の蓮原川を水源とする別の水路が北濃駅敷地内の線路沿いで確認された（図3b）。歩岐島地区は豪雪地帯であり、冬季の除雪作業の効率化のため、線路からの投雪場所としてこの水路が設置されたという情報が聞き取りで得られた。この水路は途中で分岐しているが、どちらも駅敷地内の転車台の下床に導水された後、別の水路で排水される構造となっている（図3c）。これは転車台の下床への積雪防止ならびに台上の線路からの投雪のための構造であるという情報が聞き取りで得られた。このほか、現地調査では、西側の山から流下するごく小規模な河川（中河原谷）が確認された（図3d）。

過去の地籍図では、与太郎淵から南東側に流出していたと考えられる水路が確認された（図2）。この水路は、100 mほど下流で長良川に合流していたことが過去の地籍図から確認され、それと類似する位置に現存していることが現地調査で確認された。また、中河原谷の水ならびに転車台の下床の水は、この水路に集約されて長良川に流下していることが確認された（図3e）。

文献調査

与太郎淵について記述している文献、ならびにそこに生息していたヒブナについて記述している文献は、計10件が確認された。以下、発行年の順に列記する。なお、一部の文献は、他の文献の情報を流用した二次資料の可能性があるが、いずれも引用文献が明記されておらず、各情報の出典が正確に確認できないため、一次資料と二次資料の判別は行わなかった。

1. 美濃飛騨両國諸川魚類取調書（岐阜縣，1881）

この文献では、郡上郡歩岐島村（現在の郡上市白鳥町歩岐島）に「與太郎淵」という池が存在していることが記述されている。また、与太郎淵の面積は90坪あまり（約300 m²）であること、ヒブナの形状は通常のフナと異なること、体サイズは約6-7寸（18-21 cm）であることが記述されている。体色は1歳から3・4歳までは「黒緋ノ斑色」あるいは「黒等」で、5歳で「緋色」となると記述されている。ヒブナの体色は「最も美麗ナル緋色」で、通常のキンギョの「遠ク及フ所ニアラス」と記述されている。このほか、住民が鑑賞目的でキンギョとともにヒブナを与太郎淵で蓄養していたことが記述されている。

なお、今回の文献調査では、岐阜県歴史資料館に収蔵されている「美濃飛騨両國諸川魚類取調書」を閲覧したが、執筆者、発行年、発行機関の情報が記載されていないことが確認された。そのため、本研究では、金古・千藤（2008）の推測に従い、1881年に岐阜縣が発行し

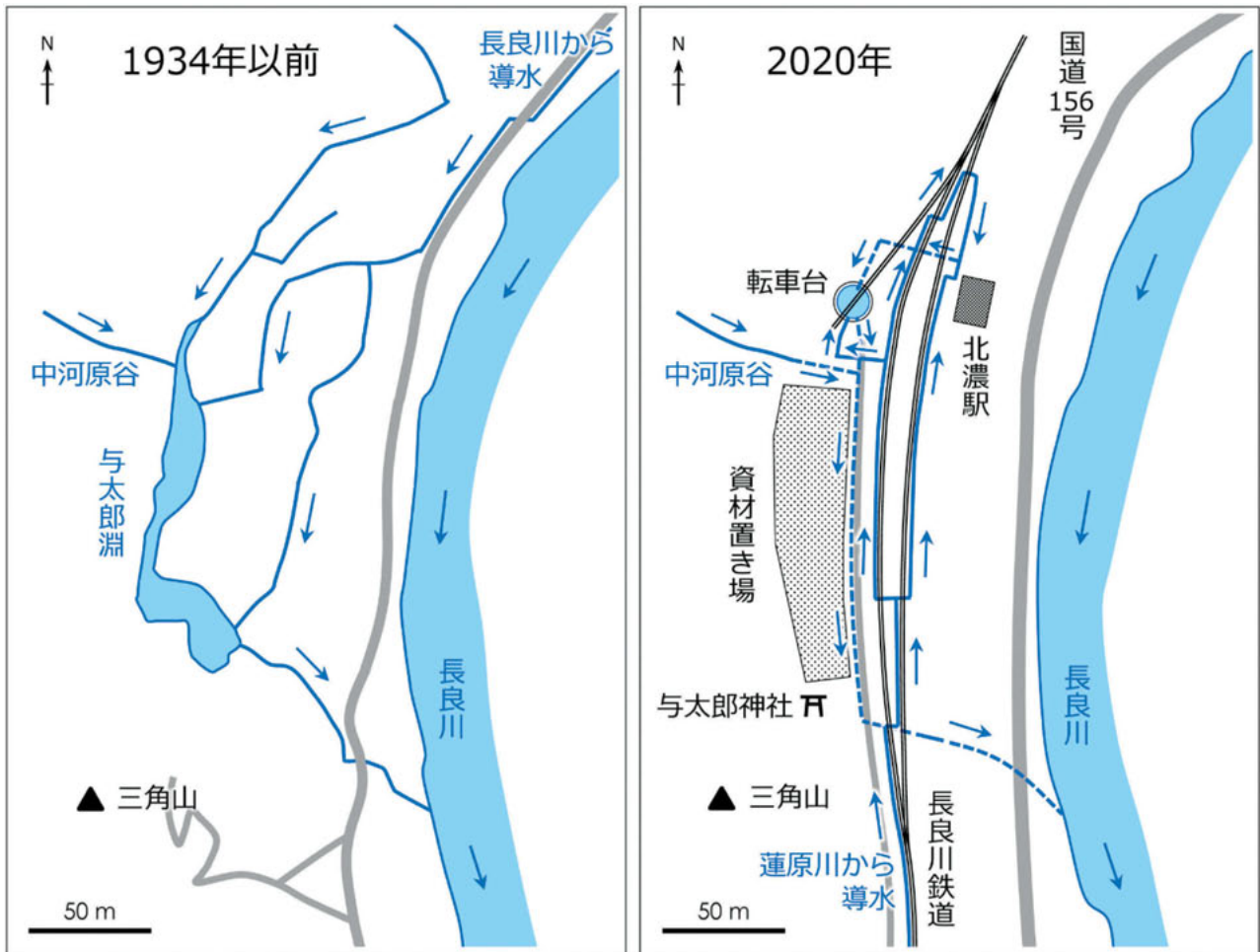


図2 1934年（北濃駅開業）以前の与太郎淵の推定図，ならびに同一地点の2020年の現況図．青色は水域（点線は暗渠の推定位置），矢印は流向，灰色は道路，黒線は線路を示す．

たものとして引用文献の欄に記載した。

2. 岐阜県産魚類豫報（田中，1909）

この文献では，1897年に「郡上郡彌富村」の与太郎淵でヒブナが採集されたことが記述されている．この文献でのみ与太郎淵の所在地が彌富村と記述されている．彌富村は，現在の郡上市大和町万場・剣・大間見・小間見地区に相当し，歩岐島村（当時）より10 kmほど南に存在していた．著者が把握している文献の範囲では，この田中（1909）以外に，歩岐島村の与太郎淵と同名の池が彌富村に存在していたという情報や，彌富村の池にヒブナが分布していたという情報はない．田中が「彌富村の与太郎淵」をヒブナの分布域と記述した経緯は不明であるが，村名を誤認したものと推測される．

3. 郡上郡案内（戸塚，1917）

この文献では，与太郎淵が北濃村歩岐島の「山崖」に位置していたことが記述されている．また，そこに「世に珍しき緋鮒」が生息していることが記述されている．

4. 美濃國長瀧史料（片野，1934）

この文献では，与太郎淵の所在地が北濃村大字歩岐島字中河原であることが記述されている．また，水面に浮かんでいる赤い布を拾い上げようとした与太郎という人物が池の中に陥って再び浮かび出るとはなかったこと，それが淵の名称の由来になったことが記述されている．このほか，与太郎淵に「珍魚緋鮒ノ游泳ヲ見ル」と記述されている．

5. 郡上八幡町史 下巻（太田，1987）

この文献では，「与太郎淵は底なしを伝えていたが，今は埋められてあとかたもない」と記述されている．なお，この文献は，1961年に発行されているが，今回の文献調査では1987年の復刻版を参照した．

6. 郡上郡郷土誌（郡上郡郷土誌編集委員会，1962）

この文献では，与太郎淵の伝説として「与太郎という男が，落ちると鮒になって底にかくれてしまった」と記述されている．

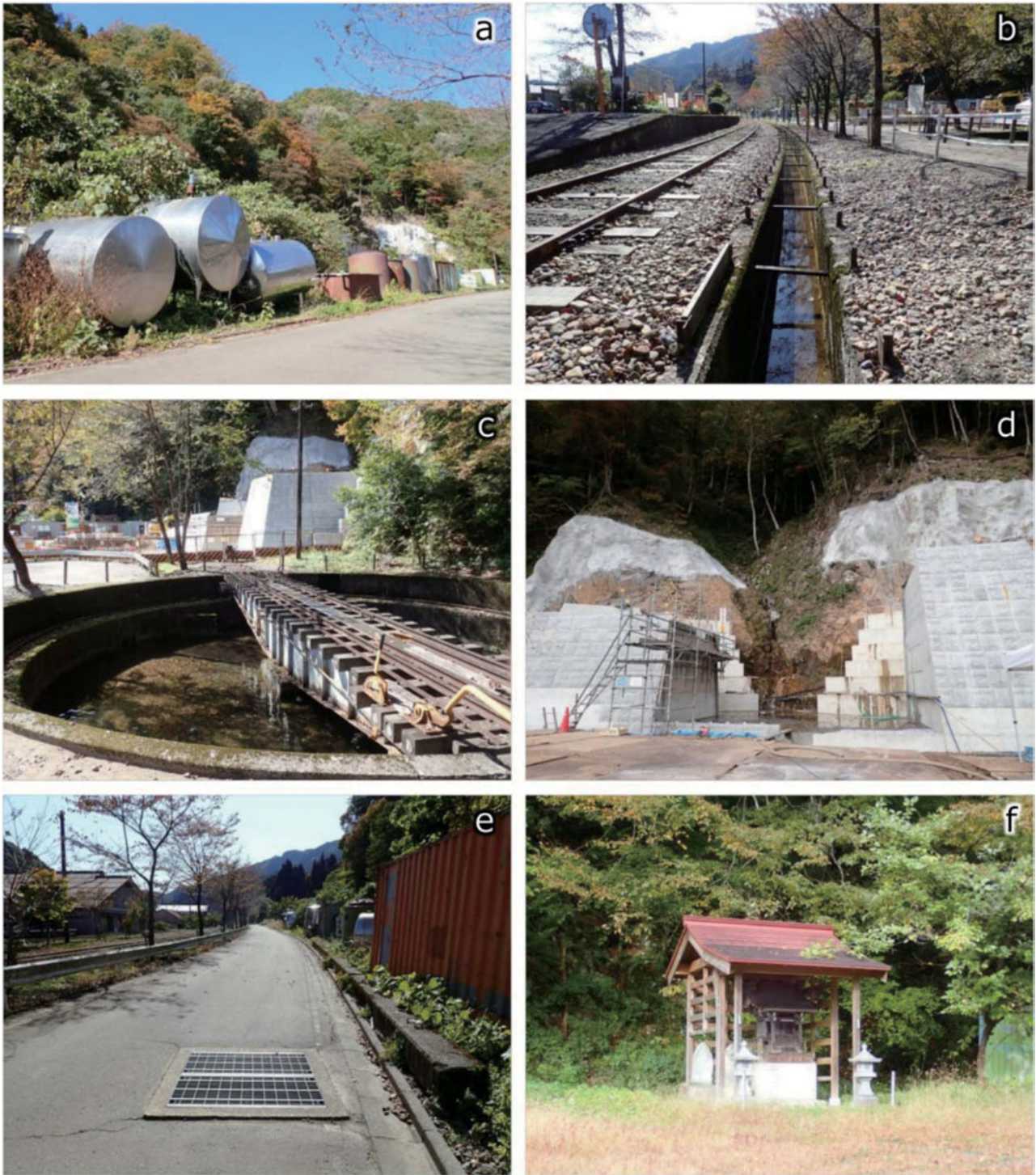


図3 与太郎淵の跡地および周辺の現況 (a: 資材置き場, b: 北濃駅敷地内の水路, c: 転車台, d: 中河原谷, e: 転車台や中河原谷から長良川に流下する暗渠, f: 与太郎神社).

7. ほくのう風土記（北濃小学校，1969）

この文献では、北濃駅付近の「下河原」に水が出てできた淵が「長淵」と呼ばれていたこと、与太郎という人物がそこに落ちたとされることから与太郎淵と名付けられたことが記述されている。与太郎淵の所在地は下河原と記述されているが、実際の字名は中河原であり、著者の誤認と推測される。また、与太郎淵が御母衣ダムの建

設工事に伴って埋め立てられ、「土場」に改変されたことが記述されている。このほか、「伊勢湾台風、室戸台風、十六号台風」によって歩岐島地区に災害が続いたこと、それが「与太郎淵のたたり」だといわれていたこと、三角山（与太郎淵の跡地の西側）に犬山成田山から「神様をおうけて、まつた」のが与太郎神社であること、その後は大きな災害がないことが記述されている。

8. 白鳥町史 通史編下巻（白鳥町教育委員会，1977）

この文献では、与太郎淵が「山際」にあったこと、池に浮かんでいる赤い布を拾い上げようとした与太郎という人物が水中に引きこまれて出られなくなってしまったこと、それからこの池が与太郎淵と呼ばれていること、その底に「カワロウ（河童）」が住んでいるとあって恐れられてきたことが記述されている。また、御母衣ダム建設に伴う北濃駅の拡張工事で1956年に埋め立てられて「資財等の置き場」となり、「跡かたもなくなった」ことが記述されている。また、別項では、与太郎という人物が落ちて「鮎になり、淵の底にかくれた」と記述されている。

9. ほくのう風土記（北濃小学校，1981）

この文献では、池に浮かんでいる赤い布を拾い上げようとした与太郎という人物が水中に引きこまれて出られなくなってしまったこと、それからこの池が与太郎淵と呼ばれていること、その底に「カワロウ（河童）」が住んでいるとあって恐れられてきたことが記述されている。また、別項では、与太郎という人物が淵に落ちて「鮎になり、淵の底にかくれた」と記述されている。このほか、与太郎淵が御母衣ダムの建設のために埋められて「土場」に改変されたこと、埋め立て後に「伊勢湾台風、室戸台風、十六号台風」によって歩岐島地区に災害が連続して発生したこと、それが「与太郎淵のたたり」だといわれていたこと、三角山（与太郎淵の跡地の西側）に犬山成田山から「神様をお受けして、まつた」のが与太郎神社であることが記述されている。

10. 北濃の史跡と伝承（北濃地区伝承クラブ，1990）

この文献では、与太郎淵が「山際」にあったこと、与太郎という人物がこの池で魚を釣っていて「カワロウ（河童）」に引きこまれてしまったこと、それからこの池が与太郎淵と呼ばれていること、池の底には「カワロウ」が住んでいるとあって恐れられてきたことが記述されている。また、与太郎淵には、多数のフナやコイが息していたこと、1956年に御母衣ダム建設に伴う北濃駅の拡張工事で埋め立てられたこと、それによって資材置き場となって「跡形もなくなった」ことが記述されている。このほか、「埋没された与太郎淵の、ぬし（精）を祀る」ため、1963年に「小さな社に不動様がおまつり」されたことが記述されている。

考 察

地籍図・現地調査ならびに文献調査により、与太郎淵の位置、埋め立ての経緯、名称の由来、ヒブナの分布記録、来歴、与太郎淵の跡地および周辺の現況について、以下

の情報が得られた。

与太郎淵の位置

地籍図・現地調査の結果、与太郎淵が存在していた位置が特定された。これは北濃駅の西側の山際であり、戸塚（1917）、白鳥町教育委員会（1977）、北濃地区伝承クラブ（1990）の記述と一致した。与太郎淵の形状については、南北方向に細長いことが過去の地籍図から確認された。これは、北濃小学校（1969）が記述している与太郎淵の別名「長淵」と一致しているといえる。

面積については、岐阜縣（1881）では約300 m²、過去の地籍図では1,623 m²とされており、両者には大差があった。与太郎淵は、水路が部分的に拡張したような形状の池であり、水路との境界が不明確であるため、測定者によって与太郎淵の範囲の定義が異なっていたものと推測される。

水源については、「駅の付近（中略）に水がでて」という記述があった（北濃小学校，1969）。現地調査で確認された中河原谷がそれに相当する河川と推測される。過去の地籍図では、与太郎淵の北側や東側に接続する複数の水路が確認された。これらも与太郎淵の水源のひとつだったと考えられる。また、流出する水路については、与太郎淵の南東側に存在していたことが過去の地籍図から確認された。

与太郎淵の埋め立ての経緯

与太郎淵は、北濃駅が開業した1934年以降も存在していたが、庄川での御母衣ダム（高山市荘川町および大野郡白川村）の建設に伴う駅の拡張工事によって1956年に埋め立てられている（白鳥町教育委員会，1977；北濃地区伝承クラブ，1990）。北濃駅は御母衣ダムの工事現場への資材輸送の中継地点とされ（渡利・有代，1996）、鉄道から自動車への積み替え作業の場所を確保するため、与太郎淵の全面的な埋め立てが実施されたと考えられる。

与太郎淵の名称の由来

与太郎淵の名称については、片野（1934）、北濃小学校（1969，1981）、白鳥町教育委員会（1977）、北濃地区伝承クラブ（1990）にその由来が記述されていた。それらは、いずれの文献も与太郎という人物が池に引き込まれたという点で共通している。片野（1934）によれば、与太郎淵の名称の由来は、与太郎という人物が赤い布を追って池に引き込まれるというものだった。これと同様の情報は、1980年頃まで存続していたことが確認された（白鳥町教育委員会，1977；北濃小学校，1981）。しかし、1990年には「与太郎と言う男がこの池で魚を釣っていて『カワロウ』（河童）に引きこまれ

てしまった」という内容に一部変化しており（北濃地区伝承クラブ、1990）、近年は、名称の由来が脚色されていることが示唆された。

片野（1934）、白鳥町教育委員会（1977）、北濃小学校（1981）では、与太郎という人物が赤い布を追って池に引き込まれたという内容が記述されている。白鳥町教育委員会（1977）と北濃小学校（1981）では、池に引き込まれた与太郎が「鮒」になったと記述されており、これは布の色とヒブナの体色との関連性を想起させる内容といえる。ただし、明確に「緋鮒」と記述していたのは片野（1934）のみであった。それ以降の文献には体色に関する記述がなく、単に「鮒」としか記述されていない（郡上郡郷土誌編集委員会、1962；白鳥町教育委員会、1977；北濃小学校、1981）。このように、かつて与太郎淵にヒブナが分布していたことは、現地においても忘失されているのが実情と考えられた。

ヒブナの分布記録

与太郎淵のヒブナに関する情報は、岐阜縣（1881）、田中（1909）、戸塚（1917）、片野（1934）に記述されていたが、1934年以降の文献では記述されていなかった。今回確認した文献の範囲内では、ヒブナの記録が80年以上途絶していることが確認された。ただし、聞き取りでは、1950年代に全長20 cmほどの赤い魚が与太郎淵にいたという情報が得られた。そのため、ヒブナは、1934年以降も与太郎淵で残存しており、埋め立てが実施される1956年まで生息していた可能性がある。

ヒブナの来歴1：キンギョと混同された可能性

ヒブナという名称は、本来、自然分布域において通常体色のフナ属魚類から偶発的に出現した緋・赤・橙・黄色の個体を指すものである（松井、1935；Makino, 1941）。ただし、そうした原義のヒブナ以外に、キンギョの1品種であるワキンをヒブナとみなす事例が古くから存在する（松井、1934, 1941；Makino, 1941）。キンギョの尾鰭は、鮒尾型（フナと同様の形態）と開き尾型（三つ尾、四つ尾、さくら尾、孔雀尾など）に大別される（松井、1941）。ワキンでは、鮒尾型と開き尾型の両方が存在し、ワキンの鮒尾型とヒブナを目視で識別することは困難とされる（松井、1935, 1976）。また、Makino（1941）は、鮒尾型の個体をヒブナ、三つ尾や四つ尾の個体をワキンと説明しており、英名「common gold-fish」に相当するものはヒブナであるとしている。1930年代にはワキンの鮒尾型がヒブナという商品名で流通していた例があるほか（松井、1934）、九州ではワキンの鮒尾型をヒブナと呼称する地方があったとされ（松井、1941）、当時すでにヒブナの定義が不明確にな

っていたのが実情である。

岐阜縣（1881）によれば、与太郎淵ではヒブナとキンギョが混生していたが、ヒブナの体色は「最も美麗ナル緋色」で、キンギョの「遠ク及フ所ニアラス」と記述されており、両者が異なる魚として認識されていたことが確認された。「最も美麗ナル緋色」と一致するかどうか検討の余地があるが、松井（1934）によれば、ヒブナはワキンと比較すると概して体色が薄い個体が多いという。ただし、今回の文献調査の範囲では、与太郎淵のキンギョの体色に関する情報は確認されず、ヒブナの体色との具体的な差異については不明である。

ヒブナおよびキンギョの初期の体色は、フナと同様である（松井、1934）。キンギョの初期の体色は、淡黒色、鉄色、青銅色、蒼黒色とされ（瀨瀬、1915；松井、1934, 1935, 1941）、ワキンの例では、紅色または白色への変化はふ化後2ヶ月から半年ほどの間に観察されている（松井、1934）。一方、ヒブナの体色変化の時期はワキンよりも遅く、2年目に体色に変化する個体も存在するという（松井、1934）。岐阜縣（1881）では、与太郎淵のヒブナの体色は1歳から3・4歳までは「黒緋ノ斑色」あるいは「黒等」で、5歳で「緋色」となると記述されている。明治時代はいわゆる数え年が常用されており、生年が1歳として扱われていた。したがって、岐阜縣（1881）が記述している1歳は0+、3・4歳は2+および3+、5歳は4+に相当する。与太郎淵のヒブナは、0+から2+や3+までの期間は黒色と緋色が混在する斑状の体色または黒色であり、4+で緋色に変化していたものと考えられる。このように、与太郎淵のヒブナは、体色変化の時期が遅いことから、キンギョである可能性は否定できる。

ヒブナの来歴2：放流由来の可能性

与太郎淵では、ヒブナとキンギョのほか（岐阜縣、1881）、フナとコイの分布も確認された（北濃地区伝承クラブ、1990）。しかし、長良川におけるフナとコイの分布域は、郡上市美並町から三重県桑名市長島町付近にかけてとされる（丹羽、1957）。与太郎淵（標高445 m）は、それらの分布域の上限である郡上市美並町（標高170 m）より30 km以上上流側に位置していることから、フナやコイも放流に由来する可能性がある。そのため、ヒブナが与太郎淵においてフナから自然発生的に出現したものだったとしても、自然分布域での現象とは言い難い。

与太郎淵では、キンギョの放流時期は不明であるものの、1881年にはすでに生息が確認されている（岐阜縣、1881）。岐阜県内では、明治時代初期には山間部の村でのキンギョの生産記録があることから（秋道、1979）、当時流通していたことは事実と考えられる。キンギョの

輸送が可能であったのであれば、ヒブナの輸送も十分可能であったものと考えられる。こうした背景から、与太郎淵のヒブナが他の地域からの輸送・放流に由来する可能性は否定できない。

ヒブナの来歴 3：交雑由来の可能性

フナとキンギョの交雑個体がヒブナと扱われる場合があることにも留意する必要がある(三好, 1903; 松井, 1935)。三好(1903)は、江戸時代後期の天保年間にフナとキンギョとを交雑させた事例があるとし、それにより作出された個体がヒブナであるとしている。松井(1935)は、フナとキンギョが正逆いずれの組み合わせでも交雑可能であることや、それらの交雑に由来する個体が繁殖能力を有することを実際に確認している。キンギョの雌とフナの雄の交雑個体の例では、生後3年間は体色に変化するものは少数である(松井, 1935)。これは、ヒブナの体色変化の時期がキンギョより遅いという特徴と同様であり(松井, 1934)、与太郎淵のヒブナの特徴(岐阜県, 1881)にも類似しているといえる。与太郎淵にはフナとキンギョの両方が生息していたことから、ヒブナとされている個体がそれらの交雑によって出現した可能性についても考慮する必要がある。

与太郎淵の跡地および周辺の現況

与太郎淵の跡地は、現在、大部分が資材置き場に、一部が道路になっている。現地調査では、いずれの地点でも与太郎淵の痕跡は確認されなかった。太田(1987)によれば、埋め立て後の与太郎淵は、すでに1961年の時点で「あとかたもない」状態だったという。2020年10月現在、かつての流入河川だった中河原谷で砂防工事が行われており(図3b)、与太郎淵の跡地の形状は今後さらに変化するものと予想される。

現地調査では、かつて北側や東側から流入していた水路は確認されなかった。その一方で、南側の蓮原川を水源とする水路が北濃駅敷地内の線路沿いで確認された。また、隣接する転車台の下床にそれらの水路が流入し、円形のコンクリート池のような状態になっている。この転車台の下床の池は、与太郎淵の位置と重複していないことから、与太郎淵を流用したものではなく、陸地を掘削して設置したものと推測される。また、転車台の下床の池で魚類が観察されることがあったが、蓮原川から水路を通じて迷入したものが一時的に生息しているに過ぎないと考えられる。

流出する水路については、与太郎淵の南東側に存在していたことが過去の地籍図から確認され、それに類似する位置に現存していることが現地調査で確認された。しかし、現在は大部分の区間が暗渠に改変されており、与太郎淵が存在した当時の痕跡は確認されなかった。

歩岐島地区では、与太郎淵が1956年に埋め立てられて消失した後、1963年に与太郎神社〔北濃地区伝承クラブ(1990)では「不動様」と記述されている〕が創建されている(北濃小学校, 1969, 1981)。長良川流域では1959年の伊勢湾台風、1960年の第12号および16号台風、1961年の第2室戸台風による災害が連続して発生している(白鳥町教育委員会, 1977)。歩岐島地区では、特に1960年の第16号台風による被害が大きく、この時には北濃駅敷地内に土砂が流入している(渡利・有代, 1996)。北濃小学校(1969, 1981)によれば、与太郎神社はそれらの災害が契機となって創建されたという。与太郎神社は、当初は三角山に創建されたが、その後、北濃駅に隣接する公園に遷座され、現在は与太郎淵の跡地の南側に再度遷座されている(図2, 3f)。現在、与太郎という名称は、この神社でのみ使用されている。

まとめ

本研究では、岐阜県郡上市白鳥町歩岐島地区の与太郎淵に分布していたヒブナについて情報を整理した。ヒブナの来歴については不明な点があるものの、生息していた水域や年代について一定の知見が得られた。今回のような文献調査は、得られる情報量には限度があるが、生物のかつての分布状況、特に人為的な環境変化が本格化する高度経済成長期以前の分布状況を把握するうえで有効な手法と考えられる(田子, 1999; 日置ほか, 2000; 岸・徳原, 2019)。また、本研究では、消失した水域の位置の特定に過去の地籍図が寄与することが例示された。現在の生物の分布状況の評価、あるいは分布状況の経時変化の検証では、対照となる過去の情報が不可欠である。しかし、これまでの研究では、古い年代の文献や地籍図はあまり活用されておらず、生物のかつての分布状況は十分に把握されてこなかったのが実情といえる。古い年代の文献は、現在の学名・標準和名と当時の地方名との照合に注意が必要であるものの、生物のかつての分布状況を解明する際の貴重な情報源となる(秋道, 1979; 中島, 2013; 岸, 2018)。今後は、他の生物あるいは地域についても、古い年代の文献や地籍図の情報を整理することが望まれる。

謝 辞

長良川鉄道の方々には、現地調査の際にお世話になった。岐阜県歴史資料館の方々には、文献の閲覧の際にお世話になった。岐阜県方法務局八幡支局の方々には、地籍図の取得の際にお世話になった。神谷伸一氏には、1950年代の与太郎淵について伺った。今井隆幸氏には、北濃駅の水路や転車台について伺った。ここに記して各

位に感謝する。

文 献

- 秋道智彌 (1979) 明治初期・飛騨地方における生産魚類の分布論的研究. 国立民族学博物館研究報告, **4**, 285-339.
- 岐阜県 (1881) 美濃飛騨両諸川魚類取調書. 岐阜県, 岐阜, 150 p.
- 郡上郡郷土誌編集委員会 (1962) 郡上郡郷土誌. 郡上郡教育振興会, 八幡, 511 p.
- 針生 勤・山代昭三 (1986) ヒブナとフナ, ワキンとの外部形態の比較. 鉦路市立博物館紀要, **11**, 53-60.
- 日置佳之・須田真一・百瀬 浩・田中 隆・松林健一・裏戸秀幸・中野隆雄・宮畑貴之・大澤浩一 (2000) ランドスケープの変化が種多様性に及ぼす影響に関する研究—東京都立石神井公園周辺を事例として—. 保全生態学研究, **5**, 43-89.
- 北濃地区伝承クラブ (1990) 北濃の史跡と伝承. 北濃地区公民館, 白鳥, 100 p.
- 北濃小学校 (1969) ほくのう風土記. 北濃小学校, 白鳥, 64 p.
- 北濃小学校 (1981) ほくのう風土記. 北濃小学校, 白鳥, 121 p.
- 池田 碩 (2015) 南山城に存在した巨椋池と干拓後の現状. 奈良大学大学院研究年報, **20**, 15-33.
- 金古弘之・千藤克彦 (2008) 『美濃飛騨両諸川棲息魚介図 附魚類取調書』に見る明治期の岐阜県内の水生生物相. 岐阜県立博物館調査研究報告, **29**, 9-44.
- 鹿野雄一・高田 (遠藤) 未来美・山下奉海・田中 亘・小山彰彦・菅野一輝 (2017) 奄美琉球におけるフナノの生息状況と体色多型. 魚類学雑誌, **64**, 95-105.
- 片野 温 (1934) 美濃國長瀧史料, 岐阜縣郡上郡北濃村役場, 北濃, 168 p.
- 岸 大弼 (2018) 岐阜県高山市の苔川における食用藻類“すのり”の過去の分布および利用. 地域生活学研究, **9**, 1-15.
- 岸 大弼・徳原哲也 (2019) 昭和時代初期のサツキマス分布: 農林省水産局「河川漁業」の情報からの推定. 魚類学雑誌, **66**, 187-194.
- 小西 蘭 (2010) シナイモツゴ: 希少になった雑魚をまもる. 魚類学雑誌, **57**, 80-83.
- 額綱理一郎 (1915) 金魚の褪色に就て (上). 動物学雑誌, **27**, 125-130.
- 黒岩 恒 (1927) 琉球島弧に於ける淡水魚類採集概報. 動物学雑誌, **39**, 355-368.
- Makino, S. (1941) A karyological study of gold-fish of Japan. *Cytologia*, **12**, 96-111.
- 益子帰来也・墨田勉彰・朝倉弘修・村中 勝・山本 明 (1970) 今江潟干拓に関連して生じた魚類の大量斃死について. 金沢大学理学部能登臨海実験所年報, **10**, 1-14.
- 松井佳一 (1934) 日本産金魚ノ遺傳學的研究. 水産講習所研究報告, **30**, 1-82.
- 松井佳一 (1935) 科學と趣味から見た金魚の研究. 弘道閣, 東京, 421 p.
- 松井佳一 (1941) 金魚. 河出書房, 東京, 178 p.
- 松井佳一 (1976) ヒブナとテツギョ, 金魚との関係 (遺稿). 淡水魚, **2**, 41-44.
- 三好音次郎 (1917) 金魚問答. 又間精華堂, 大阪, 95 p.
- 中島 淳 (2013) 筑前国統風土記において貝原益軒が記録した福岡県の淡水魚類. 伊豆沼・内沼研究報告, **7**, 23-37.
- 西野麻知子 (2008) 内湖の生物多様性保全・修復に向けて. 滋賀大学環境総合研究センター研究年報, **5**, 13-30.
- 丹羽 彌 (1957) 魚類. 長良川の生物編集委員会 (編), 長良川の生物. 岐阜, pp. 190-218.
- 小笠原節夫・越田捷子 (1965) 宮城県品井沼第七地区の干拓. 東北地理, **17**, 208-213.
- Ojima, Y. (1987) The origin of natural monument, scarlet crucian carp (Hibuna) in the Harutori Lake, Kushiro, Hokkaido, Japan. *Proceedings of the Japan Academy, Series B*, **63**, 365-368.
- 太田成和 (1987) 郡上八幡町史 下巻 (復刻版). 八幡町役場, 八幡, 947 p.
- 白鳥町教育委員会 (1977) 白鳥町史 通史編下巻. 白鳥町教育委員会, 白鳥, 874 p.
- 田子泰彦 (1999) 神通川と庄川におけるサクラマス親魚の遡上範囲の減少と遡上量の変化. 水産増殖, **47**, 115-118.
- 武田和義 (2010) 兵庫県におけるため池の保全・管理の取組み. 水土の知, **78**, 501-504.
- 田中茂穂 (1909) 岐阜県産魚類豫報. 動物学雑誌, **244**, 62-67.
- 戸塚鏞助 (1917) 郡上郡案内. 郡上郡協賛會, 八幡, 135 p.
- 渡利正彦・有代和夫 (1996) ローカル線歴史紀行ふるさと長良川鉄道—越美南線・70年の歩み. 郷土出版社, 岐阜, 163 p.

付 記

国立国会図書館デジタルコレクション (2015年10月9日, 2016年3月14-16日, 2020年10月1日閲覧)
[<http://dl.ndl.go.jp/>]

